



令和4年1月1日現在	
世帯数	: 829世帯
人口	: 1512人
男	: 728人
女	: 784人

ご紹介『松本歳時記』

令和4年、コロナ禍の完全終息はまだですが、昨年と比べるとずいぶん賑わいが戻ったようです。とはいえ、人の集まる催しはまだ自粛されているようです。家に籠ることが多い中、昨年出版されたある本にふれて、改めてこの地域についての見識が広まった感じがしたものです。もうご存じの方々もお知りませうが、ちよつと内容を紹介したいと思います。

その本とは「松本歳時記」(2021年1月末日初版発行 著者/木下守 発行者/長嶺博 制作/有会社社創造社 印刷・製本/株プリント ショップ・ミネ)という一冊です。

この松本地域の歴史や文物について、広範にわたり、長年の研究成果を記してあります。大げさに言えば、松本市民が「一家に一冊」備えるべきと思いましたが、取り上げ

げた次第です。この書の出版に至るまでのいきさつなどは、興味深いですが省きまして、今の時期に関する記述をほんの一部ですが原文から抜粋したいと思います。

「執筆をされた木下守さんは、松本の民俗や文化財の調査研究に長年携わってきた第一人者で、中略、長嶺さんという立案者と木下さんという執筆者が、手を携えてこの本が上梓されることは実にすばらしく、またよるこぼしいことである。」(まつもと文化遺産保存活用協議会会長 後藤芳孝氏の推薦文より)

「おせち料理は、一年を終えて新しい年を迎える節目に、年神様を迎えてもてなすためのごちそうです。」

「二月十一日は松本のあめ市です。松本では、正月の初市で、縁起物の館を売る市ということ、で、「あめ市」と呼ぶようになりました。正月に長寿を願って

館を食べる風習は、かつては全国に見られました。今もこうした市が残っているのは、松本周辺と東北地方だけですが、中略、松本のあめ市の起源を伝えるのは、上杉謙信が、塩止めで苦しんでいた敵将・武田信玄の領内となっていた松本に塩を送ったという義塩伝説です。」

「正月飾りを焚き上げる小正月の火祭りを、松本地方では三九郎と呼びます。小正月の火祭りは、京都周辺では「左義長」と呼ばれますが、奈川地区では木曾地方と同じく「セーノカミ」と呼び、長野や上田など東北信と諏訪地方では関東地方と同じく「どんど焼き」、伊那地方では「ホンヤリ」「佐久地方では「カンガリ」、北安曇郡では「おんべ笑い」など、長野県内だけでも様々な名前で呼ばれています。」

松本地区のあらゆる文物が取り上げられていると言っても過言でないこの書、家庭だけでなく学校・公民館などにも常備したいと思えました。

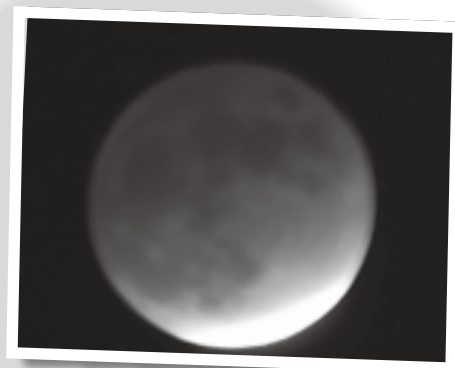


Presented by 視聴覚委員会

まちかどフォト



伊勢町のクリスマスツリー



ほぼ皆既月食

11月19日に月の97.8%が地球の影に入り込む月食が89年ぶりに観測されました。今年11月8日には皆既月食も観測できます。

命の選択 上司の指示と自分の決断

令和3年度公民館の研修も、新型コロナウイルスの影響で春は中止、状況が落ち着いて11月24日実施となりました。

場所は岐阜県加茂郡八百津町、岐阜県の南東部で木曾川に沿った自然豊かな地です。今回は杉原千畝と言つ大正から昭和にかけて約24年間外務省に奉職した方の生き様、足跡を見てきました。

それは第2次世界大戦がヨーロッパで開戦となり、西側ドイツ軍と東側ソ連の侵攻に挟まれ、リトアニアの首都カウナスで、領事代理として勤めていた杉原千畝。

1940年7月西側のポーランドからナチスドイツの迫害を逃れようとユダヤ人難民が、領事館の周りをびっしり取り巻いていた。その人たちの代表と話し要望を聞き、日本本国へ2回にわたり電報で打診したにも拘らず、「アー」という返答がこ

なつた。人道としての観点から「通過ビザ」の発給、という自分の決断で突き進む事にしたのでした。東欧から日本へ、シベリア鉄道経由と言つルートを通れる様、ソ連領事の了解を得て、ビザ

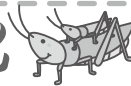
の発給に取り組み、外務省から任地移動の指示、催促をうけながら、1日200枚のビザ発給を目標とし、自分でも何枚書いたか分らない程のビザを、体力の限界まで書き救済に手を尽くしたのです。



「命のビザ」岐阜県八百津町所蔵

自分の行動を決めるとき、自分の為あるいはみんなの幸せの為と言つ決断を迫られる事は、各自の人生で何度かあるはずですが、人生を振り返って、良かったなと思える事を、ひとつでも残したいなど、考え自戒するものがあります。

最近「昆虫食」という言葉がインターネットだけでなく、テレビや新聞などでも見かけることが多くなつたような気がしませんか。都内では昆虫食の専門店や昆虫食に特化した自動販売機が開業したとか、大手生活雑貨チェーンで「コオロギせんべい」を発売したとか。



再び昆虫食の時代に

振り返れば昭和の頃にはいなごや蜂の子はよく食べていました。よく見かけることも皆無となり、第一地区内の郷土料理店さんなどで、最近の動向を伺つてみました。



定番の味はやはり「いなご」と「蜂の子」で、稀に「ざざむし」もありですが、いずれも価格帯としては高級珍味の筆頭です。ご飯の上に納豆をかけようか、桜でんぶ(田麩)にしようか、それとも蜂の子かと悩んでいた時代とは隔世の感があります。近年注文するのはもっぱら観光客出張者を接待する社用族が中心でしたが、海外からの旅行者が増えるにつれ、かなりの割合で注文が入るようになったそうです。不思議に思つて尋ねたところ、松本で挑戦すべき伝統食材として旅行ガイドに昆虫食が掲載されていくとのことで、日本の思い出にとチャレンジしてSNS上で発信する方が後を絶たなかつたようです。

電車通り

先頃のプロ野球日本シリーズは前年最下位同士のヤクルトとオリックスが対戦しヤクルトが4勝2敗で2年ぶり6度目の日本一に輝き、セ・リーグ球団の優勝は9年ぶりで大熱戦でした。

最近の野球界最大の話題は米大リーグの大谷翔平選手の活躍ぶりです。今季ア・リーグ最優秀選手(MVP)に満票で選出され他の賞も、ほとんど総なめです。「9勝・46本塁打」をマークし投打の「二刀流」が圧倒的な評価を得ました。

彼は8年前にプロ野球、日本ハムに入り5年前には、パ・リーグ最優秀選手に輝き日本一に貢献。その後平成30年に米大リーグ、エンゼルスに入り、その年に新人王を獲得。しかしその後右肘手術で低迷していましたが昨年見事に復活し野球界の神様ベーブ・ルースに成績が匹敵する迄に成長しました。ベーブ・ルースは22年間の野球人生でしたが大谷選手は若い。今後大いに期待できそうです。

この1年で話題になった流行語に贈られる年間大賞は「リアル二刀流/ショータイム」で、納得です。